

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：34307

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520259

研究課題名(和文) 平安時代における『万葉集』訓読本文の研究 - 私家集を中心として

研究課題名(英文) A Study the Shikashu of the Heian period, the Akahitosyu

研究代表者

朝比奈 英夫 (Asahina, Hideo)

京都光華女子大学・人文学部・教授

研究者番号：50248936

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：平安時代の私家集『赤人集』について、『万葉集』との関連を視点として、他の歌集及び歌論書などの和歌関係資料に所載の本文を調査し、その結果を校本としてまとめた。当該校本は電子データで作成し、平成26年度中をめどに、和歌文学研究者の在籍する機関への寄贈を予定している。また、研究成果に関連する研究論文を2本公表した他、専門の研究会で研究発表を1本行った。

研究成果の概要(英文)：I studied the Shikashu of the Heian period. The name is "Akahitosyu", as a point of view the relationship between "Manyoshu". I investigated the relationship between Karon and Works of waka. I summarized balance sheet as the result. The balance sheet created in electronic data. By March 2015, we are planning to donate to the institution and the university library enrolled Waka literary researchers. I have published two research papers. I did a research presentation at the meeting of the professional sector.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：和歌 万葉集 私家集 赤人集 三十六人集 訓読本文

1. 研究開始当初の背景

万葉歌の平安時代における訓読の様態については、『万葉集』伝来史の研究及び万葉歌の注釈の進展に伴い、これまでに究明されたところも少なくない。とくに近時公開された冷泉家時雨亭文庫の『万葉集』関係文献や、田中大士「広瀬本万葉集の性格-巻二十の特異な傾向をめぐって」(『季刊文学』、1995)、山崎福之「『俊成本万葉集』試論-俊成自筆『古来風体抄』の万葉歌の位置-」(『美夫君志』53、2001)等をはじめとする一連の論考や、小川靖彦『萬葉学史の研究』(おうふう、2007)などの新たな知見を踏まえて、本文及び訓読の実態を再整理することは、万葉歌の伝播と享受の究明にとって十分な意義を持つと言える。

一方の私家集研究においては、本研究が主たる対象とする『赤人集』をはじめ、『人麿集』・『家持集』に万葉歌が多いことが知られている。近時、冷泉家時雨亭文庫の写本群や、大東急記念文庫の『人麿集』の紹介が行われた。研究面では『赤人集』の注釈として、阿蘇瑞枝『人麿呂集/赤人集/家持集』(和歌文学大系17、明治書院、2004)があり、個々の歌について本文の価値や特徴についての把握が進められてきた。こうした成果を参照しつつ、平安時代における万葉歌享受の様相について、全体を網羅した調査、研究が行われるべき段階に至っている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、万葉歌の伝播と享受が平安時代以降の和歌史の発展と深化に果たした役割を解明することにある。その対象として、新資料が発見されている私家集・勅撰集・私撰集から考察を試みる。具体的には、『赤人集』を中心に平安時代における万葉歌の訓読本文を精査して、訓読がどのように行われ、どのように変化していったのかを考察し、万葉歌の享受と伝播が和歌史の発展と深化に果たした役割を解明する。

まず、『赤人集』を中心に、平安時代の『万葉集』訓読本文についての厳密な本文調査を行う。『赤人集』は、『万葉集』巻十の前半部を取り入れて家集として編まれているため『万葉集』そのものに近い形態を持ち、平安私家集の『人麿集』・『家持集』との重載歌も多く見られる。こうした点から『赤人集』を中心に据えて多角的な考察を試み、万葉歌の享受と伝播の具体相を明らかにする。

次に、平安時代の和歌についての研究成果を積極的に取り入れ、『万葉集』そのものの伝来史の究明にとどまらず、平安時代に生み出された新たな表現や歌風の創成について考察を及ぼす。具体的には、『万葉集』がどのように享受され『赤人集』や『人麿集』、『家持集』などの私家集を生み出すに至ったか、それが平安時代の和歌史の展開においてどのように位置づけられ評価されるのか等を解明する。

3. 研究の方法

まず『赤人集』の諸伝本及び、当該家集所収歌に対応する万葉歌の原文及び訓の様態について精査する。『赤人集』諸伝本の収集から研究を開始し、『万葉集』及び、平安時代の勅撰集・私撰集・私家集を含めた本文の精査・校合を進め、研究終了時に校本としてまとめる。

本文の精査・校合に並行して、『赤人集』所収の作品について考察を加えていく。これにあたっては、上述の阿蘇氏の注釈の成果を踏まえつつ、とくに『万葉集』との関係に注目して、一首一首の内容や表現について検討する。以上の2点、すなわち、訓読本文の様態についての調査と個々の作品についての考察とを総合して、万葉歌が伝播していく中で『赤人集』所載歌がどのような位置を占めるのかを明らかにする。

4. 研究成果

(1)『万葉集』第三期歌人の山部赤人は、『古今和歌集』序文で「歌の聖」柿本人麿とともにその名をあげられ、歌仙の一人として選出されることとなる。そしてその赤人(平安期は「山辺赤人」と記される)の家集として、平安期に編纂されたのが『赤人集』であるが、それは、『万葉集』巻十の前半部分の平安期の訓読本文が何らかの事情で『赤人集』と誤認されたと見られ、赤人の『万葉集』の実作がほとんど収録されていない特殊な家集であった。その現存伝本は、大きく次の三系統に分類される。

第一類本

西本願寺本系統...354首

第二類本

資経本系統(歌仙歌集本系統含)...251首

第三類本

陽明文庫蔵(近・サ・六八)本...241首

このうち、第一類本と第二類本は、『万葉集』巻十の和歌に赤人実作歌を数首加えた歌集として共通しており、共通の祖本から派生したものと見られる。また、第三類本は、同じく『万葉集』巻十の和歌を収録しているが、山崎節子「『赤人集考』」(『国語国文』第45巻9号)同「陽明文庫蔵(一〇・六八)『赤人』について」(『和歌文学研究』第47号)が指摘しているように、赤人実作歌を一首も含まず、配列も『万葉集』に近いものとなっている。第一類本と第二類本の相違は、第二類本とほぼ共通する250首ほどの歌群の前に、第一類本は116首の歌群があり、『大江千里集』の歌がそのほとんどを占めているのである。

このたび取り上げる『赤人集』の新出の伝本(以下、新出本と略称する)は所謂歌仙歌集本系統の一伝本である。これについて、書誌及び歌仙歌集本系統について触れてから、当該伝本の意義について述べたい。

新出本は、江戸前期、おそらく寛文期頃の書写と思われる列帖装の一帖。表紙は、鉄紺

色地に金泥・雲母刷り・金箔散らして、草木や梅木を金泥で描いている。大きさは、縦24,3センチ×横28,2センチ。題籤は朱紙(縦14,1センチ×横3,0センチ)で「赤人集」とある。見返しは金箔地、丸型に三本の立葵の文様が見られる。料紙は鳥の子で、全20丁で。前遊紙が1丁、後遊紙が3丁である。内題は、端作り題で、1丁表1行目に「赤人集」とある。和歌は、全249首収録されている。

元来、三十六人集として書写されたものの一帖が『赤人集』として独立したものと思われる。実際、同装同型の伝本が何集か存在し、藤田洋治所蔵『敏行集』がある外、鶴見大学所蔵『猿丸大夫集』も一連の伝本である。

本文は、1丁表から内題に続いて2行目から、「久堅のあまのは山にこの夕霞たなびき春立にけり」の和歌で始まり、巻末歌は、「秋過てかげにもせんを故郷の花橘も散にけるかも」である。249首という歌数とこの和歌配列から、歌仙家集本系統の伝本であると推測が可能であるが、事実、和歌本文を精査してみると、同じ249首本の伝本の特徴をよく表わした伝本であることが知られる。そして、この調査を通して、歌仙家集本系統の本文の性格の一端を解明する端緒となると思われる。

歌仙家集本系統は、『私家集大成』CDRom版では、第二類本と分類されている。その第二類本をさらに細分すると、次のようになる。和歌配列はほぼ一致しているが、収録和歌の相違を基準に分類したものである。

a系 冷泉家時雨亭文庫蔵資経本系 251首(以下、資経本と略称する)

b系 京都大学蔵本系 249首

b'系 正保版本系 247首

c系 内閣文庫B本系 264首(237首に『雖入撰集不見家集哥』27首)

この4系の収録和歌の相違を調査すると、次の2点の見通しを得ることができる。まず、a系の251首本の形態から、数首脱落したのがb系の京都大学蔵本、静嘉堂文庫本、東奥義塾本、内閣文庫A本、広島大学本、真田宝物館本、杉谷氏蔵本、新出本と、b'系の正保版本や諸伝本であると考えられる。次に、本文を精査すると、資経本の本文から直接の書承関係は考えられず、同様の形態の伝本から派生した本文であろうと思われる。さらに、資経本の集付けとb系伝本の集付けとの相違からもこれら諸本の関係を窺うことができる。いま結論のみを述べると、新出本の属するb系統の京都大学本や静嘉堂文庫本などは、歌仙家集本系統であるにも関わらず、集付けは意外に多くはない。そして、それらの諸本では集付けがほぼ一致することから、これら一連の伝本がかなり近い性格を持つことが知られるのである。

収録和歌数と集付けに触れたが、さらに和歌本文についても触れておきたい。以下、具体例を四例、挙げて本文の異同と、そこから考えられることを述べる。

【例1】(「資」は資経本、「京」は京都大学本の略称、和歌の末尾は家集の歌番号)

(資)こひしきはけなかきものをいまたにもみしかくもかなあひみるよたに(216)

(京)こひしきはけなかきものを今たにもともしむへしやあふへき夜たに(215)

四句が「みしかくもかな」と「ともしむへしや」と相違している。『万葉集』西本願寺本の訓みも「ともしむべしや」であり、ある段階で『万葉集』の訓みを取り入れた改訂本文がb系京都大学本などの本文となったと考えられる。元来が同系統の本文であり本文の異同も決して多くはない中での典型的な例だが、かような『万葉集』の訓みの影響による改訂、和歌全体の表現内容の吟味による改訂が、b系の本文には見られる。換言すれば、よりよい本文を残すために他の文献を探し、また和歌内容を吟味して、本文を改訂しているのである。

もう一点、b系の本文(というよりも歌仙家集本系統の特徴でもある)として、異文注記が見られる点がある。

【例2】

(資)なつくさのつゆわけころもまたきぬにわかころもてのひるよしもなき(147)

(京)夏草の露わけ衣またきぬ(きもせぬ)に我衣手のひるよし(なとわかそてのかわく時なき)もなき(146)

この歌は、『新古今集』1375番に人麿の詠として採歌された『万葉集』1994番歌であり、『定家八代集』にも選入された有名な和歌である。おそらく『新古今集』の本文が同じ歌の異伝歌、あるいは正しい本文として注記され、それが諸伝本にも反映しているものであろう。静嘉堂文庫本・東奥義塾本・杉谷氏蔵本・新出本・真田宝物館本に共通してみられる注記でもある。

本研究で取り上げた新出本は、江戸初期の書写にかかる歌仙家集本系統の一伝本である。流布本である正保版本に比べ2首収録和歌が多い本文で、静嘉堂文庫本や京都大学本と同様の249首本である。本文も静嘉堂文庫本・真田宝物館本・京都大学本などと、ほとんど一致する。版本にも見られる細字注記も、版本よりも多いこともほぼ一致している。これら版本以前の形態を保った伝本の本文調査には、有益な伝本の出現であった。資経本と歌仙家集本諸伝本、また歌仙家集本諸伝本と正保版本との本文の相違を考察してゆくためには、版本以前の本文が明確になることが大切だからである。歌仙家集本系統の諸本を3系に分類し、資経本の形態(形態としては資経本のような251首本、和歌本文は相違するか)から派生した系がどのような経緯をたどって正保版本となっていくのか、今回の考察ではまだ不十分であるが、機会があれば論じてみたいと考えている。(以上は雑誌論文に該当)

(2) 現存『赤人集』は、『万葉集』歌人・山部赤人の家集として、平安時代に編纂されたものであるが、内容は『万葉集』巻十の作者不明和歌群の前半 230 首ほどが、誤って赤人の家集とされたもので、それに数首の赤人実作歌が付加されているという特殊な家集である。この『赤人集』の本文と『万葉集』の訓読本文から、平安期の『万葉集』訓読本文の一部が推察されるという視点から、本研究は進められてきた。

現存諸本の特徴を略述すると、第一類本は、西本願寺本とその転写本の系統で、西本願寺本は平安期の書写にかかり、平安期の『万葉集』訓読本文を反映させたものであることは疑いない。本文は、『万葉集』巻十前半部分に、赤人実作歌数首と大江千里『句題和歌』が漢文詞書を失った状態で収録されているもので、この『句題和歌』116 首をのぞいた部分が考察対象となる。第二類本は、資経本と所謂流布本である歌仙家集本系統の本文で、251 首ほど、伝本によって歌数は僅かに相違する。本文は、『万葉集』巻十前半部分と赤人実作歌数首から構成され、従来流布本である歌仙家集本系統の本文が用いられることが多かったが、資経本の紹介により、鎌倉期の本文まで遡ることが可能となった。第三類本は、孤本で他に伝本の存在が知られない陽明文庫(陽・サ・六八)本の本文で、『万葉集』巻十の前半部分とほぼ同様の歌配列が見られ、赤人実作歌が全くないという特徴を持つ。

当然のことながら、『万葉集』巻十で構成された『赤人集』の本文と『万葉集』巻十の訓読の比較検討は、先行研究でも幾度となく試みられてきた。この度、歌仙家集本系統本文と資経本の本文とを比較しながら、『赤人集』の本文を考察より古い時期における本文の整定という作業を通して、幾つか新たな点が指摘できた。まず、従来の研究では、最も書写の古い西本願寺本を中心にしながらも『赤人集』の本文は、流布本の歌仙家集本系の本文をも組み込んだものだったが、この度、資経本と歌仙家集本諸伝本の本文を比較してみると、歌仙家集本の本文は『万葉集』のより新しい本文や和歌全体の読みから起因した独自の本文に変更している個所が指摘でき、資経本の本文がより古態を保っている場合が多いことが明らかになった。その結果、歌仙家集本を一步落とすことによって、西本願寺本と資経本、陽明文庫本という3系統の本文を比較してみると、この三本の本文が意外に近似していることがわかった。この3系統の本文を中心に『万葉集』の平安期の訓みをある程度想定できることがわかったのである。その『万葉集』の訓みは、従来言われてきたように、『万葉集』の語彙・語法を尊重しながらも、和歌全体の意味を重視して、万葉仮名からは離れた訓みも少なくないものであったと思われる。

一方、流布本系統の歌仙家集本の本文は、

より新しい『万葉集』の訓みや和歌全体からの歌言葉の選択などがみられ、特に歌仙家集本系の中の内閣文庫本系統の本文にその傾向、すなわち、勅撰集や『万葉集』のより新しい訓みの採用や和歌全体からの歌言葉の選択という傾向が強いことが明らかとなり、歌仙家集本の本文の性格の一端が見えてきたと思われる。また、この比較検討から、『赤人集』の依拠した『万葉集』は、現存本にはない異本歌が含まれていること、そして従来言われてきた『万葉集』の異伝本文を採用している場合が多いこと、さらに平安期には訓読がなかったとされる長歌訓が二か所にわたって収録され、不十分ながらも長歌をも訓読しようとしたより古い長歌訓が記載されていることも注目すべき点であろうと思われる。(以上は学会発表に該当)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

藤田 洋治、朝比奈 英夫、近世期の人麻呂・赤人の一面 - 河野美術館蔵『柿本朝臣・山部宿禰歌集』について、東京成徳短期大学紀要、査読無、46号、2013、1-21
朝比奈 英夫、藤田 洋治、歌仙歌集本『赤人集』の一伝本 新出伝本の本文とその位置づけ、京都光華女子大学研究紀要、査読無、51号、2013、1-10

[学会発表](計1件)

藤田 洋治、赤人集歌仙歌集本系統の本文について、平安文学の会3月例会、於大妻女子大学、2014年3月29日

[図書](計1件)

朝比奈 英夫、藤田 洋治、赤人集及び万葉集訓読本文対校表(奈良~南北朝篇)、私家版、2014年度公表予定、260

6. 研究組織

(1) 研究代表者

朝比奈 英夫 (ASAHINA, Hideo)
京都光華女子大学・人文学部・教授
研究者番号：50248936

(2) 研究分担者

藤田 洋治 (FUJITA, Youji)
東京成徳短期大学・言語コミュニケーション科・教授
研究者番号：60165397
(平成25年度より研究協力者)